

## 課題歌「月」

### 「雁部貞夫先生選」

一〇、コンチエルト終えし熱狂冷ますよに辻井伸行は「月光」を弾く  
演奏会の熱狂ひとしきり。それを冷ますように辻井氏のピアノが「月光」の曲を奏で、満場水を打った如く静まった。その対照の妙を読んだ。

三三、プリゴジンの死の報はしる真昼間を蒼天に白き上弦の月  
プリゴジンの余りにも劇的な死が伝えられた時に、天上界に真白い半月が浮かんだ。眼前にその鮮やかな画面が浮かぶ。

三二、背に吾をくくりて父は襤褸洗ひ月に向ひて涙ぬぐひぬ  
男手一つで、作者は父親に育てられたのであろうか。戦後混乱期の日本人の生活把えた歌だ。

### 互選「一 席」

六、逆上り付き合ってくれた友がいて鉄の匂いと宵月の空と

### 互選「二 席」

四二、望月を拝める祖母の真似をして小さな手合はす背中の吾子も

### 互選「三 席」

一〇、コンチエルト終えし熱狂冷ますよに辻井伸行は「月光」を弾く

三六、守るかに生家を囲む野辺の花しづかに月がてらしゆきたり

## 自由歌

### 「雁部貞夫先生選」

九、幾度か愛していると繰り返す言葉にこもる彼の真実  
素朴な詠法でシンプルに彼の「愛の真実(まこと)」を伝える。誰の胸にも共通の体験がある筈だ。

三九、「ゑび坂の電気の下のおかめ石」人は歩めり時代を超えて  
ふだんは目立たないが、祭りの名所唄の一節にしたいような歌だ。郷土を歌う大切さを喚起する。

一八、軍事便の束眺めつつ迷いたり保存か破棄か決断つかず  
第二次大戦、外地から日本の留守家族へ充てられた「軍事郵便」(葉書や封書)が束となり残っている。それをもう捨てるか、保存するかで悩む作者。われわれはこうした歌を作る最後の世代なのだ。

### 互選「一 席」

二九、人生のところどころに貼る付箋ひとさし指は記憶の扉  
四一、ひと足を懸命に歩む母の腕とればひんやり汗ばみてゐる

### 互選「三 席」

一〇、黒光る屋根の端反も誇らしく山車は軒先ゆらゆらとゆく  
一二、豆稲架のはじける音は母の声「体をいといえや」ぬける青空

西 春彦

鶴見 輝子

和田 操

三尾 幸子

西野 紘子

西 春彦

細江 和子

鈴木 養子

谷口 茂雄

坂田 壽美子

打保 洋子

武藤 久美

西 春彦

本山 順子



# 令和五年「お月見短歌会」高校生の部 選評

選 桐山 吾朗

入選 第一席 飛騨神岡高等学校 一年 濱本 小羽

レシーブよ月より高く飛んでみろ休む間もなきラリーを止めて

【評】 バレーボールの試合の場面を連想しました。対戦する両チームが互いに一步も引かず緊迫したゲーム展開。作者は極度に高まったその緊張感に耐えられず、ラリーを止めるある種の強いエネルギーを期待する。「月より高く飛ぶレシーブ」がそれででしょうか。現実の競技に月が絡んできて、静と動の対比が大きな柱になり、既成の観念を超えた若者らしい感性の作品です。

ただし、論理の飛躍には課題が残ります。独自性が独断に陥ることには注意しましょう。

入選 第二席 吉城高等学校 二年 山田 倖那

手をつなぎ歩く雁木の母と娘に月はやさしく光をそそぐ

【評】 「雁木」は、雪国の街路に設置された長い庇（ひさし）の防雪通路。その雁木の道を行く母と娘の足元を月の光が照らしている。優しく静かな光景がピタッと捉（とら）えられていて、斎藤真一画伯の描いた盲目の旅芸人・瞽女（ごぜ）の絵をおもわせる雰囲気があります。ただ、この作品の核である「雁木の母と娘」は、読者の側にはかなり唐突（とうとつ）に提示される光景で、必然性が弱く、また「月が光を注ぐ」という表現も、既成のイメージ風でいささか陳腐です。感覚と表現をいかに磨くかが課題でしょう。

入選 第三席 斐太高等学校 一年 門前 遙希

群雲のかかつて月がかくれんぼものさびしげな犬の散歩道

【評】 飼い犬の散歩コースが、月に雲がかかったために暗くなって、辺りが寂しそうな状況を描いている。どこにでもありそうな風景ですが、「かくれんぼ」という語句もあいまって、童謡のような親しみのある世界になっています。素直な表現ではあるものの、上の句と下の句の結びが、「かくれんぼ」「散歩道」とともに名詞で結ばれ、体言止めの連続が平板な印象を与えてしまうことに注意。短詩形文学は、初句から結句まで表現に目端（めはし）を効かせることが大切ですから。

## 【総評】

「お月見短歌」は、「月」を詠み込む必要がありますから、題詠の制約の中で自身のイメージを広げなければなりません。応募歌を見ますと、そのあたりの「苦闘」がうかがわれて、思わず同情と面白さを感じました。「月」という伝統的な歌題のためか、古典的な単語がアンバランスに用いられたり、「満ち欠け」といった月の運行に関わる表現が見受けられたのはその例です。

全体に、応募間近になって作歌に取組み始めたと思われる即席感が、構想・表現・用語の各所に残っていて、詠む者の共感を得るにはまだまだ…の印象を持ちました。次回は、早くから構想を練って、充実した力作をお寄せください。期待しています。